Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2023-07-12

和歌山県南紀地域におけるスポーツツーリズムの展開 : 上富田町におけるスポーツ合宿を中心に

加藤, 謙心
河本, 大地

(Citation)
兵庫地理,68:49-65

(Issue Date)
2023

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482456

兵庫地理 68（2023）49-65

和歌山県南紀地域におけるスポーツツーリズムの展開

―上富田町におけるスポーツ合宿を中心に―

加藤謙心・河本大地

Ⅰ．はじめに

１）研究背景

日本では、人口減少と高齢化の急速な進行が問題となっている。国勢調査によると、外国人を除く日本人の人口は、2010 年の 1 億 2638 万人をピークに減少に転じ、5 年後の 2015 年には 1 億 2532 万人となった。65 歳以上人口の割合も年々高まり、1950 年にはわずか 5%だったのが、2005 年には 20%、そして 2015 年には 26.6%と、世界でも最高の水準となった（原田 2020）。特に中山間地域では、人口減少と高齢化は顕著であり、農林水産省によると、中山間地域の人口減少がこのまま進めば、2015 年から 2045 年の 30 年間で、山間農業地域の人口は半減し、過半数が 65 歳以上の高齢者になると見込まれている。平地農業地域でも人口が 3 割以上減少し、高齢化率が 40%を超えると予測されている。このような背景がある中で、政府は 2014 年から地方創生政策を実施しており、2019 年 6 月に「まち・ひと・しごと創生基本方針 2019」が公表され、新しい時代の流れを力にするとして、「新たなビジネスモデルの構築等による地域経済の発展」、「海外から稼ぐ地方創生」、「Society5.0 の実現に向けた技術の活用」、「スポーツ・健康まちづくりの推進」が 2020 年度の取り組みとして掲げられた（相原ほか 2020）。

国土交通省は 2009 年 12 月、国を挙げて観光立国の実現に取り組むため、国土交通大臣を本部長とし、全府省の副大臣等で構成する「観光立国推進本部」が立ち上げられた。 そして本部の下に置かれた「1 観光連携コンソーシアム」において 2010 年 1 月、政府の会議として初めて「スポーツ観光」が採り上げられ、これを受けて 2010 年 5 月 18 日に スポーツ団体、観光団体、スポーツ関連企業、旅行関係企業、メディア及び文部科学省など関係省庁が一同に会する「スポーツツーリズム推進連絡会議」が誕生した。

本会議及びその下に置かれた 4 つのワーキングチームは、延べ二十数回に及ぶ会議を開催し議論を積み重ねると同時に、ワーキングチームが抽出した諸課題を「実証実験」及び「調査」で検証を進め、このたび、課題解決のための着眼点や方策を「スポーツツーリズム推進基本方針」として取りまとめた。政府が 2010 年に「スポーツ立国戦略」を策定した後、2015 年にはスポーツ庁を設置するなど、スポーツ振興の姿勢を積極化しており、これをきっかけに、全国の自治体において、スポーツが持つ多様な価値を、観光やまちづくりなど地域活性化の手段の一つとして活用しようとする動きが速まっている。そして、2019 年にはラグビーワールドカップが開催され、2020 年には東京五輪の開催が控えていたことにより日本人がスポーツに対して盛り上がっていることを受け、全国各地でスポーツツーリズムを推進する動きが高まっている。江頭（2016）は、スポーツツーリズムの効果として、①訪日外国人旅行者の増加、②国際イベントの開催件数増加、③国内観光旅行の宿泊数・消費額の増加を挙げており、スポーツツーリズムの推進は、スポーツ観戦者・参加者の拡大や国際競技大会の招致・開催の増加による競技力向上を含めたスポーツ振興はもちろん、関係省庁との連携により①活力ある長寿社会づくり、②若年層の旅行振興、③休暇に関する議論の活発化、④産業の振興、⑤国際交流の促進が期待できるとしている。

日本のスポーツツーリズムの推進が活発化されてきたことにより、毎年開催されている国民体育大会を始め、各地域ならではのスポーツ大会やスポーツイベントなどが盛んに行われるようになり、人口減

少が進んでいる地域などでも賑わいを見せている。しかし、国民体育大会などで建設された競技施設の整備やインフラ整備によって、莫大な費用がかかることが問題視されており、その他のスポーツの大会やイベントが費用やサポートの面から一過性のものとして終わってしまうという課題もある。実際滋賀県の調査で国民体育大会は、2013 年から 2017 年の国体事業費の平均が約 219 億円であり、近年国民体育大会の簡素化の動きがあったものの、2024 年に開催される滋賀県での総事業費は 500 億円を超えるとされている。国民体育大会後の維持管理費などにも費用が嵩むため、競技施設を有効活用していく必要があるが、立地に関して不便な場所に競技施設が建てられているものもあり、課題が多いとされている。スポーツツーリズムを行う中で地域の住民は、「スポーツツーリズムのための施設建設は、自然環境を破壊する」と感じる意見もあり、そのため、スポーツツーリズムを推進する自治体は、施設を建設する際に、自然とのバランスを考えて建設する必要があり、加えて、スポーツツーリズムの推進を主目的とした施設で はなく、地域住民もふだん利用することができるような施設の建設を行うことが重要である（秋吉ほか 2014）。

スポーツ合宿はスポーツツーリズムの一形態といえる。スポーツ合宿地は、日本では首都圏外縁部（とくに長野県・山梨県・千葉県）など大都市周辺地域の高原避暑地や沿岸部を中心に、おもに 1950 年代以降に発達してきた。1980 年代以降は、航空交通の発展や宿泊施設・スポーツ施設の整備の進展に伴って、北海道、高知県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県など大都市から遠隔の地域にも発達した（渡邊 2020）。先行研究として、「ラグビーの聖地」と呼ばれるなどスポーツ合宿地として世間ではイメージが確立されている菅平（渡邊 2015）や陸上選手がよく訪れる奄美大島のスポーツツーリズム（須山 2010）など、スポーツ合宿地として知られている地域を研究したものが多いが、スポーツ合宿地として発展途上の地域の研究はまだ少ない。

2015 年に和歌山県で開催された「紀の国わかやま国体」で、田辺市をはじめとした南紀エリアでは、田辺スポーツパークなどの競技施設がつくられ、様々な競技が行われた。現在南紀エリアでは、国民体育大会のために建設された競技施設を利用して、スポーツ合宿や大会の誘致を積極的に行なっており、和歌山県でもスポーツ合宿が定着しつつあり、スポーツ関連で訪れた人数は新型コロナウイルス流行前までは年々上昇していた。コロナ禍においても、全国大学女子硬式野球選手権大会誘致に成功するなどの成果も挙げている。

南紀スポーツエリアに属する上富田町では、スポーツ施策を講じたことによって、現在まで 50 年間人口が増え続けているというデータがある。近隣地域の流入が主な理由であるが、スポーツによって健康増進を図った上、1989 年の「ふるさと創生事業」をきっかけとして上富田スポーツセンターなどが建設され、スポーツ合宿などが発展してきた。

このように、国民体育大会後に競技施設を有効活用して、発展を進めている和歌山県の南紀エリア、主に上富田町を事例として本研究では地域一帯でスポーツ合宿誘致に取り組み、復興庁に地域活性のモデルケースとして取り上げられた要因を明らかにし、今後の可能性を考察する。

２）研究目的

和歌山県南紀エリア、主に上富田町を事例として、スポーツツーリズム、スポーツ合宿が成立している要因と課題を明らかにする。

３）研究方法

第一に、和歌山県のスポーツコミッションである、南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会と南紀ウエルネスツーリズム協議会に対してどのような取組をしているかなどを取材し、南紀エリアにおけるスポーツツーリズムの発展の要因と課題を分析する。

第二に、南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会が発行している「スポーツ合宿案内 BOOK　和歌山南紀」に掲載されている、上富田町の 5 軒の宿泊施設に対して、経営状況や増加しているスポーツ合宿のためにどのような取組をしているか聞き取りをお

こなう。

Ⅱ．日本のスポーツツーリズム

１）スポーツツーリズムとは

国土交通省ではスポーツツーリズムについて、スポーツを「観る」「する」ための旅行そのものや周辺地域観光だけでなく、スポーツを「支える」人々との交流、あるいは生涯スポーツの観点からビジネスなどの多目的での旅行者に対し、旅行先の地域でも主体的にスポーツを親しむことのできる環境の整備、そしてMICE推進の要となる国際競技大会の招致・開催、合宿の招致も包含した、複合的でこれまでにない「豊かな旅行スタイルの創造」を目指すものと定義している。

- 「観る」：応援しているプロチームのキャンプや遠隔地アウェー戦の観戦
- 「する」：スポーツ合宿や大会イベントへの参加
- 「支える」：スポーツイベントの運営支援ボランティア

これらにより、①周辺観光や飲食宿泊などの経済効果、②人々との交流などの交流人口拡大、③旅行者へのスポーツ施設・プログラムや宿泊環境整備などによるまちづくり、④国際競技大会をはじめ、スポーツイベント招致による地域発信が期待できる。

２）日本のスポーツツーリズム推進の動向

①国による取組

2010年に「スポーツツーリズム推進連絡会議」が設置され、日本政府の方針である「観光立国日本の実現」に向け、「スポーツツーリズム」の役割の明確化と「スポーツツーリズム推進基本方針」の策定がおこなわれた。スポーツツーリズム推進にあたっては、新しい旅の魅力を作り出し、交流人口を増加させることが目指されている。また、スポーツの切り口で日本の多種多様な観光資源を顕在化させ、日本の観光力を向上させることとしている。その結果、訪日旅行者誘致及び、国内旅行の活性化につながることが目的とされている。

2012年3月に策定されたスポーツ基本計画は、スポーツ基本法の第9条の規定に基づいて、その理念を具体化し、我が国のスポーツ施策の具体的な方向性を示すものである。同計画では、「スポーツを通じてすべての人々が幸福で豊かな生活を営むことができる社会」を創出するため、「年齢や性別、障害の有無等を問わず、広く人々が、関心、適性等に応じてスポーツに参画することができる環境を整備すること」を基本的な政策課題とし、7つの課題ごとに政策目標を設定し、スポーツの推進に取り組み、スポーツ立国の実現を目指すこととしている。

スポーツ基本法及びスポーツ基本計画に基づいたスポーツ振興施策を総合的に推進するため、2015年10月には文部科学省の外局としてスポーツ庁が設置された。スポーツ基本法の理念である「スポーツを通じて『国民が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む』ことができる社会の実現」を目指し、同庁が中核となり、文部科学省の旧来からのスポーツ振興に加えて、他省庁とも連携して多様な施策を展開し、スポーツ行政の総合的な推進を図ることとしている。

また、スポーツツーリズム推進連絡会議事務局はスポーツツーリズムによるインバウンド推進の考え方として、日本の多種多様な観光資源を、スポーツを通じて発信し、体験させることで日本観光のブランド価値を向上させることを掲げており、日本各地における地域活性化を目標としている。

②日本におけるスポーツツーリズムの主な事例

日本で初めて「スポーツコミッション」の言葉を公的に提言したのは、2007年当時の社団法人関西経済同友会のスポーツ・観光推進委員会による「日本で初めてのスポーツコミッションを関西（大阪）から」であった。その4年後、2011年に観光庁に設置されたスポーツツーリズム推進連絡会議策定した「スポーツツーリズム推進基本方針」の中に「スポーツコミッションの設立促進」の文言が盛り込まれ、国としてのスポーツコミッションへの取り組みが始まった。時を同じくして、2011年10月には日

第１表　日本のスポーツツーリズムの動向

2010 年 1 月	・政府の観光立国推進本部で初めて取り上げられる
2010 年 5 月	・「スポーツツーリズム推進連絡会議」設置
2011 年 6 月	・「スポーツツーリズム推進基本方針」策定
2012 年３月	・「観光立国推進基本計画」、「スポーツ基本計画」内で位置付けられる
2012 年 4 月	・一般社団法人日本スポーツツーリズム推進機構設立
2013 年	・ビジット・ジャパン事業 10 周年　訪日外国人 1000 万人達成 ・「観光立国実現に向けたアクション・プログラム」策定 ・スポーツ庁設置構想「地域スポーツ振興によるまちづくり」 ・2020 年オリンピック・パラリンピック競技大会　東京開催決定
2015 年	・スポーツ庁設置
2016 年 3 月	・スポーツ庁・文化庁・観光庁の包括連携協定締結
2017 年 3 月	・スポーツ庁「第 2 期スポーツ推進計画」において、スポーツを通じた地域活性化の具体的施策として「スポーツツーリズム」が盛り込まれる

本で初のスポーツコミッションである「さいたまスポーツコミッション」が設立されるに至った。その後も、2012 年 3 月に策定されたスポーツ基本計画や観光立国推進基本計画に「地域スポーツコミッションの設立」の文言が盛り込まれるなど、スポーツ・観光の両面から国として地域スポーツコミッションに取り組んできた。当初、こうした動きは国を挙げて観光に取り組む中で、日本の自然や環境を活用したスポーツツーリズムによって訪日外国人旅行者の取り込みと国内観光旅行の需要喚起や消費拡大、雇用創出を目指すものだったが、近年ではツーリズムのみならず、スポーツによるまちづくり・地域活性化を担う主体としても期待され、地方自治体は、スポーツによる地域一体感の醸成や、非常時にも支え合える地域コミュニティの維持・再生・強化を地域スポーツコミッションと連携して推進することが求められている。

2021 年 3 月現在、スポーツ庁の定義する要件を満たした地域スポーツコミッションは全国で 159 団体が存在している。地域スポーツコミッションはタイプとして、都道府県レベル、市町村レベル、広域連携の 3 つに分けることができる。都道府県レベルが 25 団体、市町村レベルが 122 団体、広域連携が 12 団体である。研究対象地域である和歌山県南紀エリアの南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会は広域連携、一般社団法人南紀ウエルネスツーリズム協議会が市町村レベルに該当する。

３）和歌山県によるスポーツツーリズムの取組

和歌山県では、紀の国わかやま国体・紀の国わかやま大会の開催を契機に、県民の競技スポーツに対する関心や期待が高まっている。ナショナルトレーニングセンターである和歌山セーリングセンターでは、全国高等学校総合体育大会のヨット競技大会が 2015 年度から 2024 年度まで固定開催されることが決定している。また、2016 年 9 月に J/24 クラス世界選手権大会が開催された。

キャンプ地としては、2002 年にデンマークサッカーチームが、2007 年、2008 年にフランス陸上チームが、そして、2015 年にオーストラリア陸上チームが、本県で国際大会の事前キャンプを実施した。また、オーストラリアの陸上チームとカナダの競泳チームが、東京オリンピック・パラリンピック競技大会の事前キャンプを本県で行うことが決定していた。2016 年には、競泳日本代表チームとパラリンピック陸上日本代表候補チームが、リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック競技大会に向けた事前キャンプを本県で実施しており、女子ラグビー日

第２表　国内の主なスポーツコミッション

タイプ	No.	名称	設立年月	都市名	特徴
市町村レベル	1	さいたまスポーツコミッション	2011 年 10 月	さいたま市	・国内で初めて自治体が専門組織としてスポーツコミッションを設置。 ・観光協会、自治体、市体協、大学、商工会議所、プロスポーツチーム、メディア等が連携し設立。 ・世界的な自転車レース「ツール・ド・フランス」を誘致。
	2	松本スポーツコミッション	2013 年 4 月	松本市	・松本スポーツコミッションプロジェクトを推進して松本市の主要政策テーマである健康寿命延伸都市・松本の創造に寄与する。
	3	十日町市スポーツコミッション	2013 年 9 月	十日町市	・総合型地域スポーツクラブ、体育協会、観光協会等が連携して設立。 ・スポーツイベント等の誘致による経済効果の創出、地域の情報配信、地域コミュニティの再生などに取り組む。
	4	新潟市文化・スポーツコミッション	2013 年 10 月	新潟市	・朱鷺メッセ、ビッグスワンスタジアムなど新潟市の施設面での優位性や交通の便の良さなどをアピールする。 ・市の文化政策課、スポーツ振興課、観光政策課の職員が実務を担当している。
	5	宇部市スポーツコミッション	2014 年 10 月	宇部市	・スポーツを楽しむ元気なひとの元気なまち・宇部市の実現、健康長寿の街作りの推進。 ・スポーツクラブや健康福祉、観光、行政機関で構成。
	6	スポーツコミッションせんだい	2014 年 12 月	仙台市	・スポーツツーリズムのみでなく、ジュニアアスリートの育成やスポーツボランティアの次世代育成など、仙台ならではの役割を付加。
	7	前橋スポーツコミッション	2015 年 4 月	前橋市	・キャンプ地、スポーツ大会、イベントを誘致し、スポーツ振興や観光客の拡大を図る。 ・市や前橋商工会議所、県内スポーツ団体、旅行会社などで構成。

都道府県レベル	8	佐賀県スポーツコミッション	2013 年 4 月	佐賀県	・県単位としては全国初のスポーツコミッション。 ・職員 2 名が専任でスポーツの国際大会や全国大会レベルの各種スポーツイベント、大学などのスポーツ合宿誘致、受入の支援に取り組む。
	9	あいちスポーツコミッション	2015 年 4 月	愛知県	・広報、大会招致、・合宿誘致、大会育成、地域活性化促進活動に取り組む。 ・県内全市町村（54 市町村）のほか、観光関連、メディア、大学等 91 団体で構成。
	10	スポーツコミッション沖縄	2015 年 4 月	沖縄県	・スポーツコンベンション、競技スポーツ、生涯スポーツを一元的に管理し、スポーツキャンプ・合宿・大会・イベントの誘致受入を行う。
広域連携	11	スポーツコミッション関西	2012 年 4 月	大阪府	・経済界（関西経済同友会）が中心となり、スポーツ用品関連企業、大学、行政とも連携した活動。 ・「スポーツ＋（プラス）」をコンセプトに掲げ、スポーツ産業を軸に、ファッションや食、旅行 等の生活諸産業の可能性を広げることを目指す。
	12	美作国スポーツコミッション	2015 年 3 月	岡山県作州地域の 9 市町村	・東京オリンピック事前キャンプの誘致活動、合宿大会誘致と連動した観光施設の PR。 ・高齢者向け介護予防スポーツセミナーの開催、など。

本代表 15 人制チームと 7 人制チームの他、ラグビートップリーグ[1] チーム等も本県でキャンプを実施している。

①南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会の取組

南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会は、2015 年の国体開催を契機に整備・改修されたスポーツ施設等を有効活用するため、スポーツ合宿や大会等の誘致を目的として 2013 年 5 月に設立された。事務局は和歌山県西牟婁振興局地域振興部企画産業課に置かれ、田辺市、みなべ町、白浜町、上富田町、すさみ町、串本町で構成されている。

ネットワークをフル活用し、関西圏を中心に、北陸、東海、首都圏、韓国まで様々な社会人や大学等のスポーツ団体、旅行業者等へプロモーションを実施することで、J リーグのクラブやラグビーの日本代表の合宿など様々な合宿団体を誘致することに成功している。また、新たにビーチスポーツの国際大会等の誘致を行うために、一般社団法人日本フライングディスク協会と連携協定を締結したりするなど、裾野を拡大し

ている。

南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会の主な取組として、①パンフレット、プロモーション映像及びホームページの作成、②専門家に委託したプロモーション活動、③受入体制強化を目的とした研修会の実施、④助成金制度の創設、⑤経済波及効果の分析、⑥首都圏でのエージェント、メディア向け説明会の実施がある。

また、地元事業者も一体となった受入体制の強化を図っており、炊き出しを行うためのケータリングの実施、宿泊施設からスポーツ施設へ送迎するためバスを新規購入、歓迎セレモニーとして横断幕を作ったり、「お迎え」「お見送り」をしたりするなどを行うことで、合宿客により満足してもらう取組をしている。

地域との交流として、複数の合宿団体がスポーツ教室を開催していることも取組の一つである。スポーツ教室を開催することによって、地元の子どもたちが一流アスリートとふれあえるだけでなく、地域のスポーツ力向上や健康づくりにつなげることができている。

②南紀ウエルネスツーリズム協議会の取組

様々なスポーツ合宿やスポーツ大会が行われる上富田スポーツセンターを、2018年4月に上富田町から一般社団法人南紀ウエルネスツーリズム協議会が指定管理を受けて運営している。上富田スポーツセンターの運営・管理、上富田スポーツサロンの運営・管理、食育交流センターの運営を行い、利用客のサポートをしている。また、旅行会社「和歌山スポーツトラベル」を運営していることから、上富田スポーツセンターを利用するスポーツ団体が、電話1本でグラウンド予約・宿泊・弁当の手配を行えるように対応している。

スポーツ合宿だけではなく、スポーツ大会の開催も積極的に行っている。主に小学生や中学生を対象とした、サッカーや野球の大会を定期的に開催し、地元の子どもたちを中心にスポーツの普及を進めている。

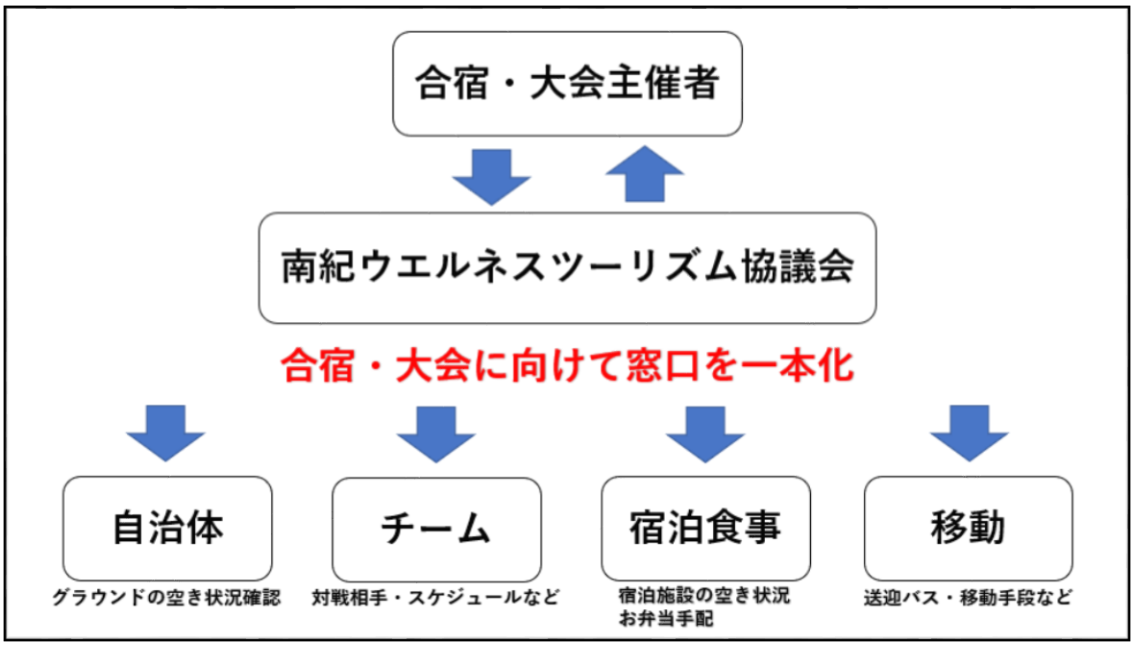
上富田スポーツセンターでも合宿団体によるスポーツ教室を開催しており、主にサッカー、野球、ラグビーのスポーツ教室を開催し、子どもから大人まで、スポーツの普及や健康増進の取組を進めている。

第3表　南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会助成金制度

事業名	概要
オフシーズン施設使用助成金	南紀エリア内においてオフシーズンに合宿を実施する県外の団体に対し、助成金を交付。
現地プロモーション支援事業	南紀エリア内に合宿を誘致する目的で対象者を現地に招きプロモーションを行うとき、当該対象者に対し支援金を交付。
新規合宿団体獲得事業	南紀エリア内で、新たにスポーツ合宿等をする県外の団体に対し、宿泊費用の一部を助成。
地域交流促進支援事業	南紀エリア内でスポーツ教室を実施する団体等に対し、地域産品を贈呈するとき、支援金を交付。
スポーツキャンプ等サポート事業	南紀エリア内でスポーツ合宿または大会を実施する団体等に対し、歓迎セレモニーを実施し、地域産品を贈呈するとき、支援金を交付。
スポーツ大会等開催支援事業	南紀エリア内でスポーツ大会等を実施する団体に対し、助成金を交付。
トップチーム等誘致推進事業	南紀エリア内でスポーツ合宿等を実施する県外のトップチームに対し、助成金を交付。
地域の競技力向上支援事業	南紀エリア内でスポーツ教室等を実施する県外の団体に対し、助成金を交付。

また、南紀ウエルネスツーリズム協議会独自の取組として、年々増え続ける利用者からのニーズを受け、上富田スポーツセンター弁当を製造している。町内の弁当業者に、栄養士や大学の専門家を加え、スポーツ選手の体づくりに必要な栄養・ボリューム満点の弁当になっている。特に、BCAA[2)]にこだわっており、何回ものミーティングを重ねて、開発された。

地元企業の「くりちゃん弁当」、「中華料理　獅子林」、「すがちゃんの味　旨いや」、「鮨処　若松



第１図　南紀ウエルネスツーリズム協議会の合宿サポート
（南紀ウエルネスツーリズム協議会 HP より）

家」、「喫茶　茶楽」の５社で製造しており、年間約２万個の上富田スポーツセンター弁当が食べられている。

その他にも着地型観光として、世界遺産ウォークや川遊びなどの地元観光を提案している。

今後は、自転車競技の大会を誘致することや風呂を完備したいという考えを持っている。

③その他のスポーツコミッション

和歌山県のその他のスポーツコミッションには、高野山・龍神温泉ウルトラマラソン実行委員会と白浜町ランフェス実行委員会がある。前者は 2015 年度に設立された。主な取り組みとして、名前の通り高野山・龍神温泉ウルトラマラソンの開催が挙げられる。沿線の市町村の協力によりランナーに対するもてなしを充実させ、「日本一過酷」を売り言葉に、今後も毎年の開催を目指している。また、インバウンド観光振興を目的として海外ランナーの募集に力を入れ、その結果、上海やシンガポールを中心に 31 名の海外ランナーが参加している。

Ⅲ．研究対象地域の概要

１）南紀エリア

南紀エリアは、和歌山県南紀エリアのスポーツコミッションである南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会の構成組織の田辺市、みなべ町、白浜町、上富田町、すさみ町、串本町である。関西の大都市部から電車で 3～4 時間、自動車で 2～3 時間ほどかかる場所にある。この地域では、2015 年に開催された「紀の国わかやま国体」に向けて様々な競技施設を建設し、その後もスポーツ合宿などに活用されている。中には廃校になった校舎を利用して、ボルダリングができる施設もある。

２）上富田町と上富田スポーツセンター

和歌山県上富田町は、和歌山県の南西部に位置し、面積が 57.37 ㎢、人口が 15,660 人(2021 年 10 月 31 日現在)の町である。1958 年に上富田町と富田川町が合併して、現在の上富田町ができた。1971 年の「黒潮国体」を契機にスポーツ観光やスポーツ振興に力を入れており、県内屈指のスポーツ施設「上富田スポーツセンター」では、サッカー日本代表やラグビー日本代表をはじめ、数々のチームが合宿をおこなっている。毎年２月には、和歌山県で唯一のフルマラソン「紀州口熊野マラソン大会」を開催し、１年で最も賑わうイベントとなっている。

第２図　和歌山県南紀エリア　（国土地理院：地理院地図より）

第４表　南紀エリアの競技施設

市町村	競技施設
田辺市	・田辺スポーツパーク（陸上競技場、体育館、多目的ホール、野球場、室内練習場、テニスコート、多目的グラウンド） ・田辺市体育センター ・目良多目的グラウンド ・田辺市立弓道場 ・（新）田辺市立武道館 ・上秋津若もの広場 ・神島台運動場 ・文里多目的グラウンド ・グリーングラウンド ・龍神ドーム ・龍神体育館 ・中辺路多目的グラウンド ・鮎川若もの広場 ・本宮体育館
みなべ町	・みなべボルダリングウォール ・みなべ町千里ヶ丘球場
白浜町	・白浜球場 ・白浜会館 ・白浜町立総合体育館 ・白浜町テニスコート
上富田町	・上富田スポーツセンター（多目的グラウンドＡコート、多目的グラウンドＢコート、球戯場、屋内イベント広場、野球場、テニスコート）
すさみ町	・すさみ町総合運動公園（グラウンド・ゴルフ場、パークゴルフ場、多目的グラウンド）
串本町	・串本町立体育館 ・串本町総合運動公園（B&G 海洋センター、多目的グラウンド、野球場、テニスコート、雨天練習場）

上富田町の特徴として約60年間人口が増加し続けていることが挙げられる（総務省統計局「国勢調査」より）。人口増加の要因として様々な要因があるが、その中の１つとして上富田町のスポーツと健康対策が挙げられる。

1998年からの政策として「健康で生きがいのある町づくり」を謳い、スポーツと文化活動の拠点として、上富田スポーツセンター、上富田文化会館を建設した。以降、実業団の野球チーム、ラグビートップリーグ、Ｊリーグやなでしこジャパンなどの合宿を誘致し、地域の活性化と交流によるスポーツ振興を図っている。1996年からは紀州口熊野マラソン、2001年からはプロ野球ウエスタンリーグ公式戦も実施している。また、上富田町の弁当業者が力をあわせて、栄養バランスに配慮した上富田スポーツセンター弁当を開発した。年間２万食の売り上げを目指しており、町内でお金がまわる仕組みとなっている。町民自身もスポーツに親しんでおり、町内のいたるところにトリムコースが設置され、気軽にジョギングやウォーキングができる。1996年には、総合型地域スポーツクラブとして「SEACA（シーカ）」が設立され、誰でも色々なスポーツに親しむことができる。また、2017年９月にオープンしたスポーツサロンは、地域住民の健康増進や介護予防の拠点としての期待が高まっている。その他、家に閉じこもっている高齢者も歩いていける範囲でお茶や食事を楽しめる、まちかどカフェの取組を2014年から始めた。また、町内にある和歌山県立熊野高校の生徒が社会福祉協議会の職員と一緒に、一人暮らしの高齢者宅を訪問する活動をしている。高齢者が健康でいることで、健康寿命を伸ばすこと、介護保険給付費の伸びを抑えることに繋がる（全国町村会HPより）。

スポーツによるまちづくりを進めている上富田町では、1989年に地域振興のための「ふるさと創生事業（自ら考え自ら行う地域づくり事業）」[3]として交付された１億円に加え、他の補助金や地方債等により資金を調達して、上富田スポーツセンターと上富田文化会館を建設した。上富田スポーツセンターは、1992年に着工され、1995年に完成した。上富田町は、同センターを拠点にスポーツ観光と健康づくりを推進している。

写真１　上富田スポーツセンター多目的グラウンド
（2021年11月30日、加藤撮影）

写真２　上富田スポーツセンタースポーツサロン
（2021年11月30日、加藤撮影）

写真３　食育交流センター　TATONJO GARDEN
（2021年11月30日、加藤撮影）

競技施設は野球場、テニスコート４面、フットサルコート２面、サッカーやラグビーを行うことができる多目的グラウンド３面（写真１）が整備されており、スポーツ合宿やスポーツ大会を開催するには充実している施設といえる。その他にもジムやフィットネス機能を備えたスポーツサロン（写真２）、食育交流センター（写真３）など様々な施設があり、合宿客に対してのサポートが充実していることに加えて、町民にも利用してもらいやすい工夫を施している。

Ⅳ．合宿団体の入り込み

１）南紀エリアの合宿客数の推移

南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会は合宿客の目標を 10 万人に設定しており、発足した 2013 年度は 26,614 人であったが、2018 年度には 86,627 人まで増加した（第２図）。2020 年の２月頃から新型コロナウイルス感染症（COVID-19）蔓延の影響で 2019 年度より合宿客が減少を続けているが、目標の達成に近づいていることがわかる。

第３図の 2020 年度の南紀エリアの市町村別の合宿者数の割合では、競技施設が充実している田辺市と上富田町に合宿が集中していることがわかる。田辺市には田辺スポーツパーク、上富田町には上富田スポーツセンターがあることで、合宿客が集中していると考えられる。

実績として、Ｊリーグのクラブチームやラグビー日本代表候補、ラグビーワールドカップ 2019 日本大会のナミビア代表の公認キャンプなどの合宿誘致に成功し、他のスポーツの社会人強豪チームや大学などの合宿誘致にも成功している。競技については、野球、ラグビー、サッカーが多く、理由として球技場が整っている点が挙げられる。

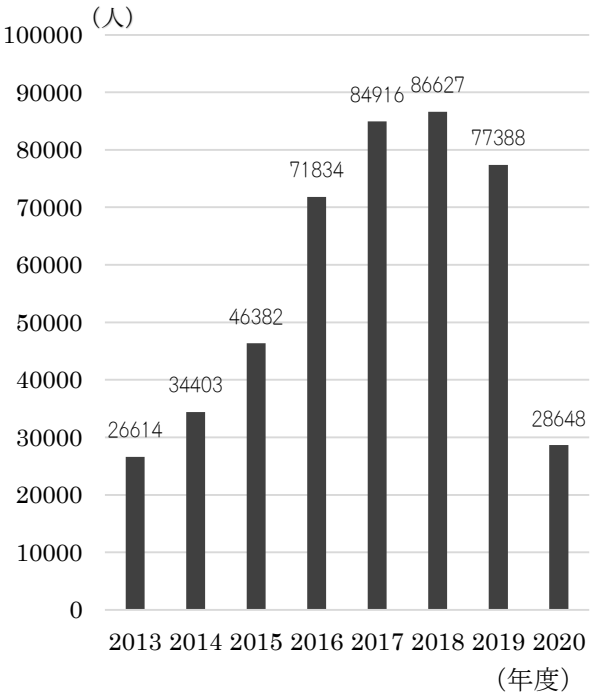
第４図の 2020 年度合宿団体別県外からの合宿団体割合では、社会人と高校生が大きな割合を占めており、次いで大学生、中学生の順番になっている。

第５図の 2020 年度の月別の合宿者数では、コロナの影響で 8～9 月の合宿者が少なく、例年通りの数値が記録されていないが、繁忙期は７月から９月にかけての夏休み期間と、２月から３月の春休み期間になっている。

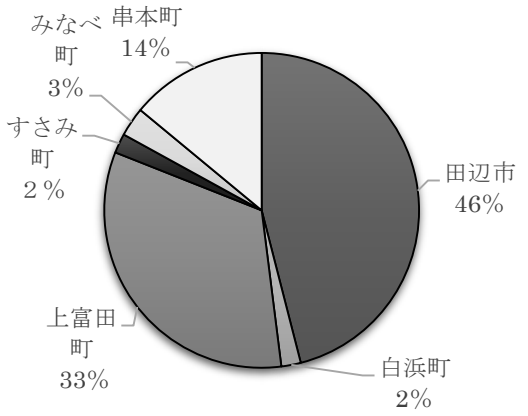
第６図の 2020 年度競技別県外からの合宿者数では、野球が圧倒的に多く、それにラグビー、サッカー、陸上競技が続いている。競技人口や設備が整っているかどうかがこの結果に反映されているのだが、少なくともコロナによってインターハイなどが中止になったことによる影響が野球以外の競技に表れているのではないかと考えられる。

２）上富田町の合宿客数の推移

上富田町の合宿客数の推移については、南紀ウエルネスツーリズム協議会が 2018 年度からとった統計しかなく、以前の詳細は不明である。しかし第７図からは、上富田町が南紀ウエルネスツーリズム協議会に合宿誘致の業務委託をしてからコロナが流行する前まで、合宿客が増加してきたことがわかる。南紀ウエルネスツーリズム協議会を経由している団体、経由していない団体のどちらも増加しており、本研究の対象である２つのスポーツコミッションの働きかけによって伸びている。サッカーやラグビーのプロチームや日本代表の合宿を誘致できたこと、また、2019 ラグビー

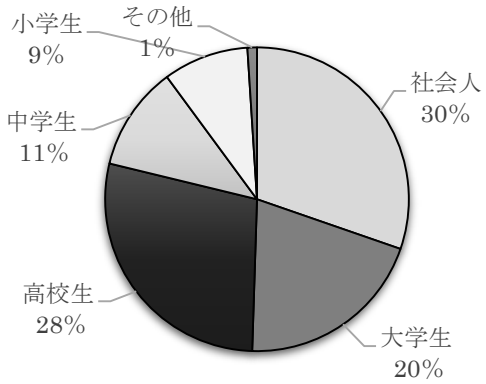


第２図　和歌山県外からの合宿客数
（南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会（2021）による。）



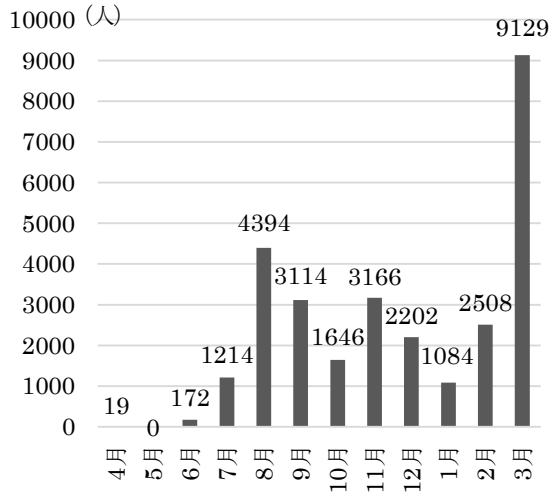
第３図　市町村別県外からの合宿者数割合（2020 年度）

（南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会（2021）による。）



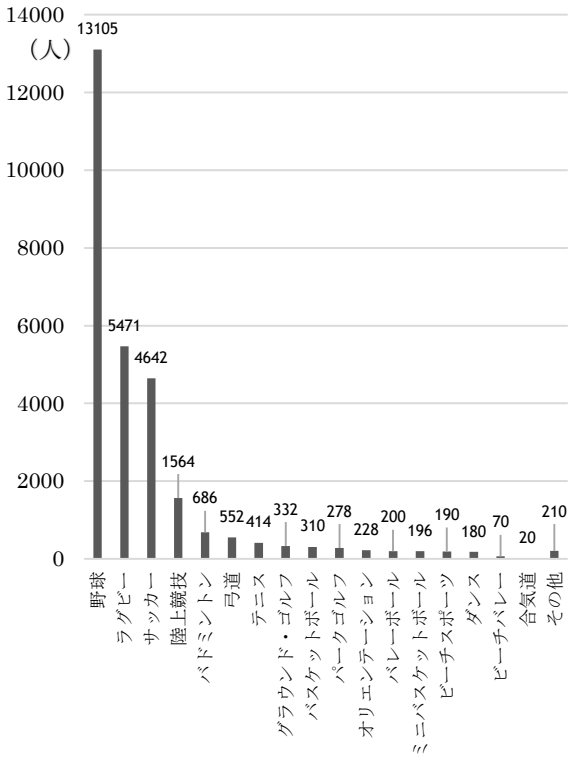
第４図　団体別県外からの合宿団体割合（2020 年度）

（南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会（2021）による。）



第５図　月別の県外からの合宿者数（2020 年度）

（南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会（2021）による。）



第６図　2020 年度競技別県外からの合宿者数

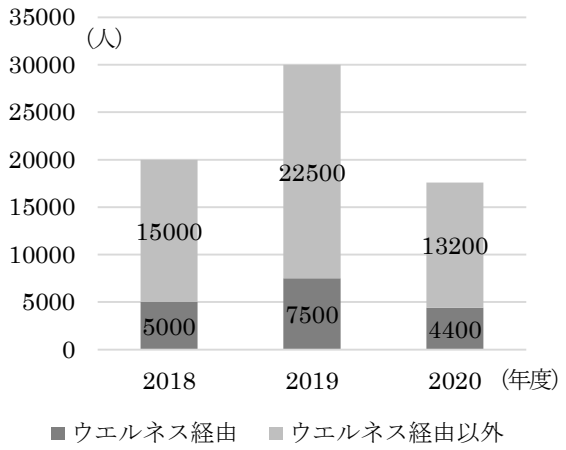
（南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会（2021）による。）

ワールドカップのナミビア代表の事前合宿の誘致が成功したことなどから宣伝にもなり、このような結果になっていると考えられる。

Ⅴ．スポーツ合宿の基盤

１）南紀エリアにおける環境的要因

和歌山県の気候は北部、南部、内陸部で違いがあり、北部の和歌山市周辺の気候は、年間を通じて天気や湿度が安定しており、降水量が少なっている。一方で今回の研究対象地域である南部の南紀エリアの気候は、黒潮の影響を受け温暖で台風の影響を受けやすく、極めて降水量の多い地域もあるが、日照時間が長く、夏は比較的涼しく冬は暖かい傾向がみられる。菅平高原がラグビー合宿の聖地としての成立条件の一つと同じであり、日本においてスポーツ合宿誘致で地域を活性化するためには、欠かすことができない条件だと考えられる。



第７図　上富田町の推定の合宿団体宿泊数
（南紀ウエルネスツーリズム協議会による。）

交通アクセスに関しては、関西の大都市である大阪や神戸から自動車を使って約２時間で田辺市や上富田町に行くことができ、鉄道でも京都や大阪から特急くろしおを利用して3～4時間で行くことができるなど、利便性が高い。また、1968年に開港した南紀白浜空港があることで、関東地方等からも短時間で到達可能である。このように大都市から訪れやすいことが南紀エリアの利点であるといえる。

２）宿泊施設の集積

南紀エリアには、日本有数の温泉地である白浜町がある。白浜町周辺では、数頭のパンダを飼育している南紀白浜アドベンチャーワールドや海水浴を楽しむことができる白良浜など、高い知名度を誇る観光地が存在している。また田辺市の内陸部には、世界遺産にも登録されている熊野本宮大社があり、熊野参詣道の中辺路を歩いて熊野本宮大社を目指す観光客が多い。

このように、元々南紀エリアは観光地として成り立っている地域が多いことから、宿泊施設もそうした観光地に集積しており、スポーツ合宿の宿泊の設備が整っているという点で問題はない。それどころか、リゾートホテルや温泉設備を兼ね備えたホテル・旅館が多いことで、宿泊の面で合宿客により満足してもらえるという良さがあり、それが新たな合宿客の呼び込みやリピーターの獲得につながっている。

また、南紀ウエルネスツーリズム協議会では、合宿のプランの中で和歌山ならではの体験をしてもらいたいと考えて、練習メニューの一つとして熊野古道を走ったり、白良浜で海水浴をして遊んだりすることを取り入れ、和歌山だからこそ味わえた充実感を持ってもらえるような提案を行っている。

３）上富田町におけるスポーツ合宿の課題

①上富田町の宿泊施設の実態

上富田町の宿泊施設は現在６軒あり、そのうち合宿客を受け入れている施設は５軒である。その５軒のうち100名以上収容できる施設が１軒で、残りの４軒は小規模の民宿である。本研究では、合宿客を受け入れている５軒に聞き取りをおこなった。

南紀白浜リゾートホテルの特徴は、ゴルフ場を併設していることから、ゴルフ客が多く、スポーツ合宿ではゴルフを目的として利用する客が多いということである。上富田町を訪れるゴルフ以外のスポーツ合宿団体のうち、人数が多い団体はこのホテルを利用することが多いが、ウエルネスツーリズム協議会経由ではなく、独自で集客している部分が他の宿泊施設に比べて強みになっていると考えられる。しかし、コロナの影響はあり、2021年夏頃から合宿利用客が少しずつ増えてきているが、コロナ前と比べると合宿利用がほとんどない状態である。今後の課題としては、合宿利用客を増やすことであり、そのために価格を下げるなどの工夫をしている。

しおじ民宿の特徴は、2017年頃まで毎年イトマンスイミングスクールが合宿利用していたことや他の競技でも後に有名になったスポーツ選手が、学生時代に利用していることから、人脈が広いということである。しかし、イトマンスイミングスクールが来なくなったり、ウエルネスツーリズム協議会の仕組みによってリピーターが獲得できなくなったりしているという課題がある。コロナの影響から回復はしてきているが、従来から利用客が減少しているという問題や後継者が定まっていないという問題も抱えている。

民宿サカイはコロナ禍で、イベントや大会による宿泊の予約が入ったとしても中止になることが多く、宿泊のキャンセルが多くなっている。また、課題として

第５表－１　上富田町の宿泊施設聞き取り結果

宿泊施設	創業年	一般客と合宿客の比率	客室数	収容人数	繁忙期		
					春休み	夏休み	工事有
南紀白浜リゾートホテル	1991	８：２	81	160	○	○	×
しおじ民宿	1970	６：４	13	30	○	○	×
民宿サカイ	1995	５：５	10	36	○	○	×
民宿喫茶くまの	1986	現在は合宿客を受け入れていない。	5	11	×	×	○
民宿加茂	1982	現在は合宿客を受け入れていない。	5	15	×	×	○

第５表－２　上富田町の宿泊施設聞き取り結果（続き）

宿泊施設	予約方法	価格	スタッフの人数
南紀白浜リゾートホテル	・ゴルフ合宿は直接 ・他のスポーツ合宿はウエルネスと直接で２：１の比率	ゴルフ合宿（学生） 1 泊 2 日 2 プレー 20500 円	50～60 名
しおじ民宿	・合宿は全てウエルネス経由	1 泊 2 食付き 6120 円	2 名 （忙しい時には調理師に来てもらう。）
民宿サカイ	・合宿のほとんどがウエルネス経由	1 泊 2 食付き 6600 円	1 名 （忙しい時はパートを雇う）
民宿喫茶くまの	・ほとんどが直接電話	要相談	2 名
民宿加茂	・電話のみ	1 泊 2 食付き 7000 円	2 名

ウエルネスツーリズム協議会と上手く連携が取れていないことが挙げられた。

民宿喫茶くまのは、現在はほとんど合宿客の宿泊を承っておらず、・公共工事の作業員の宿泊が多くなっている。併設して喫茶店を経営している。

民宿加茂も民宿喫茶くまのと同じく、現在は合宿利用がなく、ターゲットは工事関係の人である。

南紀ウエルネスツーリズム協議会の目的のひとつに地域の経済活性化が挙げられるが、ある程度大きな規模の合宿団体の利用があれば、宿泊はキャパシティが大きい宿泊施設に限られ、上富田町では自然と「南紀白浜リゾートホテル」に限られてくる。そのため、キャパシティの小さな民宿では、どれだけ合宿客が増加したとしても、1 団体の人数が多ければ経済活性化の恩恵をあまり受けられない。仕方がないことではあるが、より多くのＪリーグのクラブやトップリーグのチームの合宿誘致を成功したとしても、そのような民宿に対して恩恵はない。そして、グラウンドは整備されているが、数は少ないため、長期にわたって合宿をする団体があればそこが独占してしまう。そうなると大規模な合宿団体の合宿期間中における民宿の利益はほとんどない。スポーツ大会やイベントが開催されれば、休日に宿泊客が多くなるが、ほとんどが 1 泊の利用で、民宿は長期の宿泊を見込めない状況である。

また、上富田町で宿泊するほとんどのスポーツ合宿団体は、上富田スポーツセンターを利用するため、南紀ウエルネスツーリズム協議会を介して宿泊予約をするということが大半を占める。南紀ウエルネスツーリズム協議会が合宿団体の宿泊を手配しているため、ホテルや民宿側が利用客にリピーターになってもらおうと頑張ったとしても、再度宿泊してもらえるかどうかはわからないという問題がある。南紀ウエルネスツーリズム協議会が宿泊予約やお弁当の手配などのすべてをおこなうことは、合宿団体からすると大変便利であるが、宿泊施設側からすると、仮予約をしなければならない状況になったり、予約が突然変更になったりと振り回される状況に陥ることがある。合宿団体が宿泊施設に対して直接電話して調整するといったことがないため、南紀ウエルネスツーリズム協議会と宿泊施設との連携が難しくなっている。

その他の課題として、コロナ禍の影響で合宿を自粛する団体が増え、宿泊客が激減したり、そもそも大阪や神戸から上富田町までの交通の便が良くなったりしたことで、上富田町で宿泊する人が減少しているという現状がある。また和歌山県における宿泊の目的も時代と共に変わってきており、民泊やゲストハウスなどの簡易的で安い施設が求められてきていることにより、民宿のような宿泊施設での宿泊率が下がっているのではないかとの考えも聞かれた。

Ⅵ. おわりに

本研究では、上富田町を中心に南紀エリアのスポーツツーリズム、スポーツ合宿誘致によって地域活性化ができつつある要因を探ることが目的であった。

第一に、スポーツ合宿地としての地理的条件が整っていることである。スポーツ合宿地として代表的な地域では、夏は冷涼、冬は温暖。日照時間が長く、降水量が少ないという特徴がある。南紀エリアはその特徴に当てはまり、地域活性化の方法としてスポーツツーリズムやスポーツ合宿誘致が適切であると考えられる。

第二に、交通アクセスが良好なことである。特に関西の大都市からのアクセスが良く、大阪や神戸、京都から自動車で2時間から3時間で到達できる。電車の場合でも、京都や大阪から乗り換えせずに3時間から4時間程度で行くことができる。また、南紀白浜空港に東京便があることで、関東からも到達しやすくなっている。関西国際空港からも田辺市までは自動車で1時間30分程であり、関西圏や関東以外の地域に関しても不便ではないと考える。

第三に、もともと競技施設が充実していることに加えて、それらを有効活用しようとする組織が存在していることである。上富田スポーツセンターは、上富田町の政策の一環によってつくられ、田辺スポーツパークは国体に向けてつくられた。そういった施設を当初の目的に加えて、スポーツ合宿誘致を行うためにスポーツコミッションができたことが大きいと考えられる。和歌山県の各スポーツコミッションを中心にプロモーション活動をしていったことで、スポーツ合宿客の増加につながっている。

スポーツツーリズムは「する」スポーツ、「観る」スポーツ、「支える」スポーツが合わさることにより地域活性化することである。「する」スポーツに関して、本研究で聞き取りを行った上富田スポーツセンターでは、上富田スポーツセンターで定期的に小学生や中学生のサッカー、野球、ラグビーなどの大会を開催している。また、地元住民にも利用してもらえるようにジムやフィットネスがあるスポーツサロンを経営しており、スポーツをしてもらうことで健康増進に取り組んでいる。南紀エリア全体でも、国体以降に日置川でテニスの全国的な大会が開催されたり、コロナ禍でも田辺スポーツパークで全国大学女子野球選手権大会が開催されたりするなど、南紀エリアでは積極的にスポーツ大会を主催している。その結果、南紀エリアという地域を宣伝につながる。

2020年には、南紀エリアと日本フライングディスク協会が連携協定を締結し、南紀エリアをビーチスポーツの聖地にしようと取り組んでいたり、ワールドマスターズゲームズの一部が南紀エリアで行われる予定であったりするなど、スポーツ合宿も含めて今後も「する」スポーツは盛り上がっていくことが予想できる。

「観る」スポーツに関しては、上富田スポーツセンターでNPBの阪神タイガースの2軍の試合を行った

り、Ｊリーグのクラブやトップリーグのチームが合宿を行ったりすることで、ファンが観戦しにくるのである。ファンによって経済活性化を期待できるが、「観る」スポーツには課題が多く、知名度があるプロスポーツチームの試合や合宿の誘致がまだまだ少ない現状がある。地元に全国的に有名なプロスポーツチームが無いため、他の地域から誘致することになり、多くのプロスポーツチームを誘致することは難しいが、現在のＪリーグのクラブやトップリーグのチームの合宿誘致をきっかけに南紀エリア全体で、合宿地が定着していないスポーツに的を絞って誘致していく必要がある。

「支える」スポーツに関しては、宿泊施設が充実していることや、スポーツコミッションによる仕出し・弁当や送迎バスの手配など、大会や合宿に参加するスポーツチームに対して、手厚い待遇を行なっている。宿泊施設では料理や横断幕などで、宿泊するスポーツチームを満足させたり、仕出し・弁当は選手に対して栄養のバランスを考えて作られたりしている。南紀エリアの「支える」スポーツは充実していると考えられるが、課題もある。

第一に、南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会は、行政が運営していることにより担当者が公務員のため、数年で異動してしまうという問題がある。そのため、スポーツ合宿に関わっている施設やボランティアなどとの関係性が十分に構築できない現状にある。

第二に、南紀ウエルネスツーリズム協議会と宿泊施設の連携である。こちらは担当者が頻繁に変わるといったことはないが、南紀ウエルネスツーリズム協議会がほとんどの宿泊予約や仕出し・弁当、バスなどの手配を行うため、南紀ウエルネスツーリズム協議会とスポーツ合宿に関わる業者との関係が上手く構築できないと、両者にとってプラスになることは難しいので、しっかりと話し合いを続けて、地域活性化をしていく必要がある。

このように南紀エリアのスポーツツーリズムは、スポーツ大会やスポーツ合宿の誘致によって従来よりも地域活性化が進んでいる。しかし課題も多く、改善することができればより多くのスポーツ関係者が南紀エリアに足を運び、町がより元気になると予想できる。

このような南紀エリアのような取組は、本格的には2013年からであるものの、数値的にも結果を出していることから、課題はあるものの、スポーツコミッションによるスポーツツーリズムの成功例であると言えよう。しかし、当初の合宿客年間10万人という目標にはまだ届いていないため、まずは目標に達するためにこれからも誘致活動を積極的に行っていく必要がある。このような活動を何年も続けていくことで、口コミなどから合宿地として定着し、地域の活性化がより進むだろう。

注

1) トップリーグ：2003年から2021年までのラグビーのトップチームのリーグの名称。2022年からは「JAPAN RUGBY LEAGUE ONE」に変更されている。
2) BCAA：《branched-chain amino acid》筋肉のエネルギー代謝に深く関与する3種類の必須アミノ酸、バリン・ロイシン・イソロイシンの総称。筋肉を構成する必須アミ ノ酸の30～40パーセントを占め、運動時に効率よくエネ ルギー源として利用される。
3) ふるさと創生事業：地方交付税から交付団体の市町村一律に交付し、使い道について日本国政府は関与せず、自由としていた。上富田町はこの資金をスポーツ施設に投資し、スポーツ教育にも力を注ぐことができ、子供たちの将来につながることになった。

文献

相原正道・佐々木達也・田島良輝・西村貴之・内田満・舟木泰世（2020）：『地域スポーツ論』，晃洋書房

赤荻裕敏・村木美貴（2006）：国民体育大会に伴う競技施設整備と施設運営に関する研究，都市計画論文集41，pp. 559-564

秋吉遼子・山口泰雄・稲葉慎太郎・高松祥平（2014）：地域住民におけるスポーツツーリズムの効果の認知の研究―持続可能なスポーツツーリズムを目指して―，笹川スポーツ研究助成研究成

果報告書　スポーツとまちづくりに関する研究, pp.98-106
一般社団法人日本スポーツツーリズム推進機構：スポーツツーリズムについて https://sporttourism.or.jp/sporttourism.html (2023年2月27日最終閲覧)
江頭満正（2016）：スポーツツーリストとエクスカーショニストの経済効果比較:小江戸川越マラソンを事例に，尚美学園大学総合政策研究紀要27, pp.89-105
上富田町（1998）：『第2次上富田町総合計画　資料編』，上富田町
上富田町（2001）：『第3次上富田町総合計画』，上富田町
上富田町社会科副読本改訂委員会（2002）：『わたしたちの町かみとんだ』，上富田町
国土交通省（2011）：スポーツツーリズム推進基本方針，スポーツ・ツーリズム推進連絡会議
スポーツ庁：全国の地域スポーツコミッション活動概況 https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop09/list/detail/1413435.htm（2023年2月27日最終閲覧)
須山聡（2010）：奄美大島における新たなツーリズムの展開―スポーツ合宿によるしまおこし―，駒沢大学文学部研究紀要68，pp.17-34
全国町村会（2018）：和歌山県上富田町／住民が誇りを持ち、住み続けたい町へ https://www.zck.or.jp/site/forum/14262.html (2023年2月27日最終閲覧)
南紀ウエルネスツーリズム協議会：上富田スポーツセンター　https://wakayama-sports.com/（2023年2月27日最終閲覧)
南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会（2021）：『和歌山県　南紀エリアスポーツ合宿誘致の現状』，南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会
農林水産省（2019）：『農村地域人口と農業集落の将来予測―西暦2045年における農村構造―』，農林水産政策研究所
原田宗彦（2020）：『スポーツ地域マネジメント―持続可能なまちづくりに向けた課題と戦略―』，学芸出版社
和歌山県教育委員会（2018）：和歌山県スポーツ推進計画
南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会：和歌山・南紀スポーツ合宿案内　https://nanki-sp.jp/ (2023年2月27日最終閲覧)
渡邊瑛季（2015）：首都圏外縁農山村地域におけるスポーツ合宿地域の成立システム，2014年度笹川スポーツ研究助成研究成果報告書，pp.149-157
渡邊瑛季（2020）：宿泊施設・合宿団体・旅行会社間からみたスポーツ合宿地の存続形態―山梨県山中湖村平野地区を事例に―，地学雑誌129，pp.635-655

（かとう　けんしん・奈良教育大学教育学部卒業生）
（こうもと　だいち・奈良教育大学）